図書館からのメッセージ

フィンランドは、OECDが実施する国際学習到達度調査（PISA）で常にトップクラスの結果を出していますが、なかでも読解力の高さが際立っています。この理由については種々分析されていますが、世界トップレベルの国民読書量と無関係ではないでしょう。実際、図書館利用率は世界一といわれ、休日には家族で図書館に行き、読書をするといったお国柄だそうです。

新入生の皆さん、大いに本を読みましょう。もちろん、本は生涯を通じての師・友人となるものですが、圧倒的に豊富な読書時間がとれるのが学生時代です。青年期に触れた書物は豊かな栄養源となって、その後の人生の礎となるに違いありません。

そして、大いに図書館を使いましょう。専門性が増す大学での勉強を強力にサポートするのが、書籍・雑誌・データベースといった図書館資料です。より密度の濃い大学生活を送るために、ぜひ図書館を生活の一部としてください。

図書館スタッフ一同、お持ちしています。

用途に合わせてカシコク使おう！

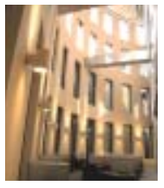
3館合わせた蔵書の総冊数

220万冊

各館の蔵書にはそれぞれ特色があるので、利用目的に応じて使い分けて積極的に利用するのがお勧めです。

中央図書館

蔵書数　147万冊
特　色　人文・社会科学の基本・専門図書
最寄駅　御茶ノ水（JR）
日・祝日もOPEN



生田図書館

蔵書数　40万冊
特　色　自然科学、理工学、農学の基本・専門図書
最寄駅　生田（小田急線）
日・祝日もOPEN

和泉図書館

蔵書数　33万冊
特　色　人文・社会科学の入門・基本図書
最寄駅　明大前（京王・井の頭線）
日・祝日はCLOSE

なぜ本を読まなければならないのか

明治大学副図書館長・経営学部准教授　畑中基紀

本を読まない人間は馬鹿になる。これは確かなことだ。読んだからといって賢くなるとは限らないが、読まなければ確実に、考える力を今以上に伸ばすことも、今以下に衰えていくのを食い止めることもできない。そして、今のあなたの考える力は、あなたが思うほどには高くないのである。

ここでいう賢さ、考える力とは、それまでに経験したことのない未知の事態に直面したときに、適切に判断し、対処をすることができる能力である。この能力は、小学校から大学受験までの「勉強」では十分に養うことができない。それはなぜか。高校までの学校教育が、基本的に、それをうまく養うようにはできていないからである。

その期間の授業内容は、国の定める「学習指導要領」によって事実上規制されている。学年ごとに教えなければならないことが細かく決められ、教科書も、学校のカリキュラムも、それに沿って作られる。そして、学習成果を確認するために試験を行い、成績をつける。その試験は、評価のしくみが公明正大であることをたやすく説明することができるように、というより、ほとんど説明しなくても済むゆえに、たいていの場合○×式で採点する形式の、つまり、正解がある問題ばかりで構成されることになる。

となると必然的に、「勉強」の内容は、教科書の記述や授業中に教師から示された事柄を記憶することが中心となるだろう。よく思いだし、考えてみてほしい。数学だって国語だって、良い点数がとれるかどうかは、けっきょくのところ記憶力の勝負だったのではないだろうか。独創的な発想で解を導き出すよりも、教科書に出ているとおり、あるいは「授業でやったとおり」の方法で答えるほうが、高く評価されたはずだ。

こういう「勉強」を長い間続けてくれれば、学ぶとは情報を憶えることであり、試験問題のような解決すべき課題には正解があると思ってしまう人が多数を占めるのも無理はないのかもしれない。その結果として、どういう発想をする人が増えるかは明らかである。日々直面する、わからないこと、取り組んで解決すべき課題には必ず正解がある。だから、どこかにある正解を探せばよい。あなたも、たとえばそんなふうにインターネットを使っていないだろうか。

しかし、ここでまたよく考えてほしい。日々の生活の中で、迷い、考え、判断しなければならない現実の課題に、あらかじめいちいち「正解」が用意されているだろうか。テレビをはじめとしたメディアに、あるいはゲームソフトとして氾濫するクイズなどを除いて、ほとんどの場合、「唯一の正解」など、どこにも用意されてはいないのがふつうだ。たとえば、明治大学へ入学したのは、他にも合格したあの大学と比べて、ほんとうに良い選択だったといえるのか。あるいは、もう一年頑張って第一志望の大学に挑戦したほうが、その後の人生がより幸福になったのではないか。だが、いくら考えても確かな答えにはたどりつけまい。たとえあなたが年老いて、人生の終わりにさしかかった時点で振り返っても、試験の正解のように明確な答えは得ることができないだろう。私たちはこのように正解のない課題に日々直面している。そのもたらす影響の大きさや深刻さの度合いはさまざまであるとしても、こうした判断を繰り返すのが日常だといえるのだ。

だから、これから学ばなければならないのは、正解のない問題に取り組み、妥当な答えを導き出す方法であり、それを身につけるのがほんとうの「勉強」である。大学とはそれを学ぶ場であるといってもよい。そして、その勉強のためにもっとも有効な手段のひとつが読書なのである。

なぜなら、一般に学問とは、まさに正解のない問題に対して、もっとも合理的な根拠にもとづいた答えを追究するものだからだ。大学図書館には、そうした知的格闘の軌跡を書きとどめた本たちがあふれている。本を読み、その軌跡を追いかけていくことで、ひとつの課題解決の実践を具体的に学ぶことができるのである。

ここで注意したいのは、学問においても、日常生活においても、解決すべき課題はいつも判りやすい「問題」の形をとって現れるとは限らないということだ。だから学問には必ず、問いを立てる過程が含まれている。妥当な答えを得るためには、まず適切な問いを立てられなければならない。実のところ、学問でもっとも役に立つのは、その部分だと言ってもいいくらいだ。せっかちな世間はすぐに「答え」を知りたがるが、答えそのものよりも、そこにたどり着くプロセスや、どのように根拠づけ（論証）を行っているかの方が大切なのだ。読書によって、また自ら真似てみることで、問いを発見する力、そして、そこから自力で答えを導き出す能力を身につけたとき、賢く生きるための知恵を、ほんとうの意味で学んだということになるだろう。